



表紙の説明

昭和33年4月1日、市街地の人口増加と父母の強い要望により、東光小学校に次ぐ市街地2番目の新設校として東光小学校より分離し当初東光小学校に4教室、留萌中学校に3教室を借用して留萌市立緑丘小学校として開校する。同年7月に屋外運動場ができ、同年10月20日に校舎が落成し

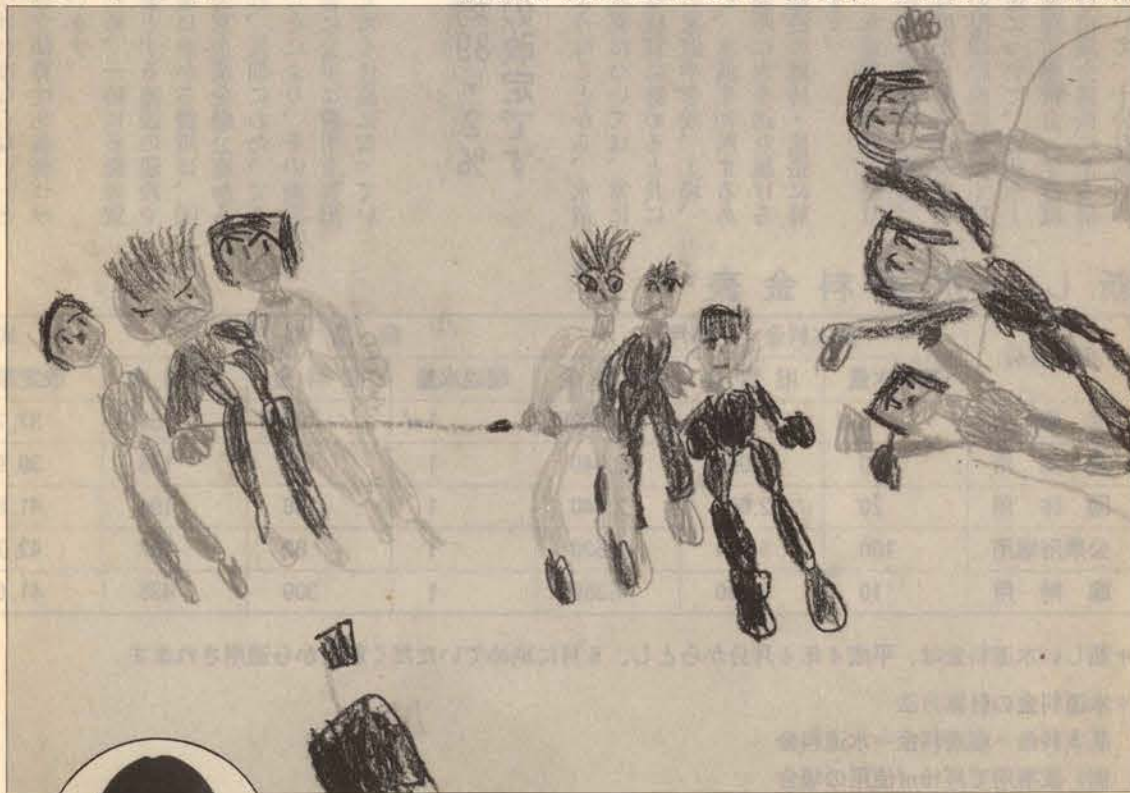


現校舎

千鳥町の本校舎に移る。昭和46年に校地に松、桜、ナナカマドなどを植樹。昭和57年体育館完成。昭和63年には、開校30周年記念式典を行い現在に至る。

ちびっこギャラリー

今月号で、しばらくの間、お休みいたします。ありがとうございました。



「雪中運動会」(留萌保育所)

三浦有衣ちゃん(港町3・6歳)

「うんどうかいのつなひきをかきました。ゆいは、ひだりから6にぬです。つなひきは、かちました。」



留萌 第六十三回 いまむかし

鉄をつくった留萌の石炭

契約書

岩手県陸中国上閉伊郡釜石
鉱山田中製鉄所長横山久太郎
ヲ甲トシ福井県越前国敦賀郡
敦賀町蓬萊大和田壮七ヲ乙ト
シ石炭売買ニ関シ契約スルコ
ト左ノ如シ

第一条 甲ハ明治四十年四月
ヨリ同九月マデ乙所有ノ留萌
炭山産石炭式萬噸ノ定額ヲ毎
月凡参千参百参拾余噸ノ割合
ヲ以テ乙ヨリ甲ハ買受クルモ
ノトス

第二条 前条ノ石炭代価ハ北
海道留萌港ニ於テ甲ノ積取船
ヘ乙ハ積込迄一切ノ費用ヲ負
担シ一噸ニ付金四円七十八銭
ト定ム

以下略

これは明治四十年二月十四
日に岩手県釜石の田中製鉄所
と当時大和田炭鉱の経営に乗

り出したばかりの大和田壮七
との間に交わされた大和田炭
鉱産の石炭の売買契約書の一
部である。

釜石製鉄所は江戸時代の安
政年間に我が国で始めて洋式
高炉が建設され、その後官営
の製鉄所をへて、田中製鉄所
が経営にあたっていた。

契約書によると四月から九
月までの六カ月間に二万トン
の石炭を留萌港から釜石に向
けて船積みすることになって
いる。明治四十二年の殖民公
報によると大和田炭鉱の明治
四十年の出炭量は二万三千六
百四十四トン、販売高一万五千
六百七十七トンとなっており、こ
の契約が履行されたかどうか
疑問である。大和田壮七が炭
鉱の経営に乗り出してまだ二
年余り、本格的な設備投資が

順調に行
われなか
ったか、
出炭量の
見積の甘
さがあつ
たのかも
知れない。
しかし、
明治四十
二年の同
公報に
「粉炭の販路は目下釜石のみ
にして切込炭は主として東京
に出す。」
とあることからその後も釜石
が得意先であったことには変
わりない。

どうして、大和田炭産の
石炭が釜石の製鉄所に送られ
ていたかという点、その炭質
にあった。炭質は「ピッチャ

「ミナスケーキング、コール」
熱量は七千四カロリーもあり、
製鉄に使うコークスの製造に
最も適していたからであった。
これ以降、鉄道留萌線の開
通、留萌港の修築事業の開始
と続き、留萌港から釜石へ向
けての石炭輸送は増加してい
ったのである。



留萌港からの石炭の積み出し